

ぼくのノート

⑤6 みんな仲間だ

東西を問わずヨーロッパには、どんなに小さな町にも広々としたサッカー場がある。プロの選手がプレーするような天然芝で、勝手にボールを蹴って遊んだりした。

ルーマニアの小さな村では、所どころ穴ぼこがあり、家畜の糞が落ちていた。小屋の陰で見ている少年にボールを蹴ると、嬉しそうに蹴り返してくれた。子どもたちの数は一人増え、また一人増え、みんなでチームを分けて試合が始まったりする。

誰が決めるわけでもないのに、上手な子は弱い方のチームに、小さな子は強い方に入る。自然発生的にできた二つのチームは力が拮抗し、毎回熱い好ゲームとなる。

不思議なのは、言葉は違うのにボールへの気持ちが通じ合う。勝っても負けても、終わったらみんな仲間だ。

地球のどこでも、いつの時代でも、広場には子どもたちのワールドがある。



認定NPO法人 いわき放射能市民測定室

たらちねクリニック

院長 藤田 操